

体育授業における指導言語としての「リズム的表現」に関する分析的検討

岩倉 志穂子 (信州大学)

1. 目的

Meinel (1981) は、運動リズムとはある運動の力動的構造であり、緊張と解緊の周期的交替と示している。このようなリズムの観点から、学習者に対する教師の言語的指導のポイントになるが、体育科教育において、指導言語に関する研究・情報の蓄積は少なく、ほとんど整理されていない状況にある。特に、「リズム的表現」は体育授業に関するテキストや辞典等にほとんど記載がないと言ってよい。そこで、まず、体育授業において「リズム的表現」がどのような場面で用いられているのかについての情報を収集することは有益であろう。本研究では、とりわけ「リズム的表現」について、運動の課題性に応じた分類を試みることを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、「リズム的表現」の具体的な事例を次の3つの方法において収集する。

- 1) 体育科教育に関する辞書類、および体育科教育学、主に教員養成段階を想定した体育科指導法関係の書籍文献、スポーツ指導者や運動が苦手な児童のための書籍等からの検索
- 2) 信州大学学校教育教員課程および生涯スポーツ課程に所属する学生を対象に、これまでの経験の中で指導された、ないしは聞いたことがある「リズム的表現」の具体的事例についてのアンケート調査
- 3) インターネット上での「リズム的表現」に関する関連ワードの検索による具体的事例の収集
集積された具体的事例を運動の課題性に応じて分類して整理する。

3. 結果と考察

書籍文献、学生へのアンケート調査等から約100件の「リズム的表現」の事例が収集された。これらを対象となる運動の課題性に応じて分類を試みたところ、以下のような整理が可能であった(表1)。

ころ、以下のような整理が可能であった(表1)。

表1 運動の課題性に応じた分類

●運動組み合わせ
Open skill
・動いてくるものへの対応動作
Closed skill
・身体の異なる部位の運動の順次性 (手足の順次的同期)
・二重の運動組み合わせ
●循環運動
・コンビネーションのリズム
●運動の順次性
●予備動作と主動作のリズム
・身体の異なる部位の動きの同期
●動いてくるものへの対応動作
●身体の異なる部位の動きの同期
●他者との動きの同期
●その他

4. 結論

ハードル走や走り幅跳び、走り高跳びなどの陸上運動や、跳び箱運動やマット運動などの器械運動、水泳の事例が多かったことから、「運動組み合わせ」や「循環運動」のように筋肉の緊張と弛緩が分かりやすい動きの場合、「リズム的表現」が用いられやすいと考えられた。今後の課題として、実際の教育現場での具体的事例などについても取り上げることや、分析的検討の幅を広げて「擬音的言語」など、より多くの具体的事例を含んだ指導言語について探究していくことが必要であろう。

5. 主な参考文献

- 1) 岩田靖・牧田有沙 (2018) 体育授業における「指導言語」研究に関する系譜と展望, 長野体育学研究, 24: 1-14